



初めての除草剤試験

公益財団法人日本植物調節剤研究協会 理事
北海道支部長

中野 雅章

今から30年以上も前になりますが、1983年に当時の北海道立十勝農業試験場から北見農業試験場に異動となり、担当も畑作物の菜豆（子実用インゲンマメ）から野菜のタマネギに替わりました。当時の道立各農試では、畑作部門は除草剤担当の研究員が一人で各種畑作物の除草剤試験を担当するのが基本でしたが、野菜分野はそれぞれの野菜の担当者がその野菜の除草剤試験を分担することとなっていました。「とにかくメーカーさんの申請書の指示にしっかり従えば良いのだから」との上司の励まし？を背に、初めての除草剤試験をタマネギで経験することになりました。

その時の春まきタマネギ除草剤実用化試験には、3～5葉期イネ科雑草対象の茎葉処理剤が数剤供試されていました。イネ科雑草の葉齢と発生の揃い具合を見ながらの処理のタイミング、処理後1～2週間かけてゆっくり進む殺草効果とイネ科雑草の後発生の様子に気を揉みながらの雑草調査時期の見極め、対象外の広葉雑草への対応など、右往左往、四苦八苦しながらの試験実施でした。結局、関係の方々にご迷惑をおかけする除草効果の成績となってしまう、大変申し訳ない思いをしたものです。申請書に記載されたねらいをきちんと把握し、その有効性を圃場試験で的確に実証させていただくためには、供試剤の特性や対象雑草の生態をしっかり勉強し理解できていなければならないことを、遅ればせながら痛感させられた次第でした。

タマネギはその草姿から葉部生育の最盛期にも地表部の遮蔽による雑草抑制効果がほとんど期待できない、葉身の損傷を避けるため春まきタマネギでは7月に入ると倒伏が揃う8月半ば過ぎまで畦間に入っての手取り除草が困難、連作が一

般的であり一度の除草失敗が翌年以降にも影響を残す、など雑草対策が特に難しい作物といえます。一方で、連作により毎年継続して雑草密度の低下を図ることができる、薬害の危険が比較的小さく定植後生育期に全面処理できる除草剤が他の作物に比べて多い、といった利点も上げられます。雑草対策、除草剤の有効活用が安定生産の特に大事なポイントとなる作物といえます。

北見農試に異動した1980年代は、北見地方のタマネギ栽培面積が引続き拡大していた時代でした。その頃のタマネギ畑では定植のあと6月にかけて、青い除草カゴを腰に下げ手ホー（株間の狭いタマネギ用の小型除草鋏）を手にした人や一輪車の付いた手押し中耕除草機を押す人の姿を日常的に目にしたものでした。ところが、数年が経過して気が付くとこれらの除草作業の風景にほとんどお目にかからなくなっていました。抑草期間の長い土壌処理剤の普及や広葉・イネ科雑草茎葉処理剤の効率的な利用が進んだことが大きく寄与したものと考えます。その後、スズメノカタビラを対象外とするイネ科雑草茎葉処理剤の普及により、スズメノカタビラ対策に苦勞する場面なども見られましたが、これもスズメノカタビラにも有効な剤の実用化により対応が図られました。除草剤の持つ力を実感させていただきながらのタマネギ除草剤試験の担当でもありました。

この4月から北海道支部に勤務しています。若い時代の苦い体験を忘れず、経験してきた除草剤の力を、さらに広くしっかりと地域で活用させていただくための役割を少しでも担わせていただくことができればと考えています。よろしく願いいたします。